

新しい種を播こう ～進取の気性を発揮する～

宮下佳廣

海賊と呼ばれた男（出光佐三）の語録をご紹介してきましたが、今回は「事業は播種に始まり播種に終わる」を取り上げてみました。播種は農夫が大地に種を播くという農業の最も根幹となる作業です。農夫は毎年、それぞれの時期に種を播き、収穫をし、又翌年種を播くという仕事を愚直に続けていきます。海賊の言葉は、事業経営も同様に常に種子を播いていくことに尽きることを教えています。

種を播くことから思い出されるのは、ミレーの「種をまく人」という名画です。この絵はアメリカボストン美術館と日本の山梨県立美術館に所蔵されており、岩波書店のシンボルマークにもなっています。絵の構図は、逞しい農夫が大地に種を播く姿が画面一杯に大きく描かれ、中でも種が空中に飛ばされているように、かなり風が強いと思われる中で種を播いている姿が特徴的です。遠くまで種を播くために、あえて風の強い日を選んで作業をしているのか、その種の播く時期が来て、やむをえず強風下で種をまいているのかは解釈の分かれるところです。



種を播くことは単純作業のように思われがちですが、実は穀物や野菜のような作物には、毎年同じ場所で栽培されると病気になり成長が悪くなる等の、「連作障害」というやっかいな症状がおきます。同じ場所に同一作物を栽培し続けると、その作物に感染する病原菌や害虫が集まってくるため、病気にかかりやすくなります。又、同じ養分を吸収するため、その作物に必要な特定の養分が不足してきます。トウモロコシ・ムギ・ダイズ・トマト・サツマイモ等が代表例です。それだけに、何時どんな種を何処に播くのが農夫の腕の見せ所となります。

千代田の事業経営に置き換えても同様のことが言えます。以前に紹介した「不易流行」の考えに沿っていえば、「不易」は、農夫が大地に種を播き続けることと同様に、「日本のものづくりの現場で、商社として新しい価値を創造する」ことであり、「何時、どんな種を、どんな場所に播くか」は、新しい事業モデルを考えていく、いわば「流行」の考えといえましょう。

時代は少子高齢化、人口減少社会という大きな変革期に直面しています。昨年スタートした新経営陣と社員の皆さんが進取の気性を発揮し、寒さの冬にも暑さの夏にも負けることなく、弛まず新しい種を播いていきましょう。

2016/02/01

Problem First !

～私心なき心と厚い信頼～

宮下佳廣

私達は日常生活をおくる上で、公私を問わず物事の良しあしの結果を人に伝えなければならぬ場面に出会います。その中でも特にかんばしくない内容を上位者へ報告することが一番難しいものです。このような場面での対応について、処世訓の宝庫といわれる中国の故事と今日の企業活動の事例から考えてみたいと思います。

中国清朝の時代、勃発した太平天国の乱を鎮圧すべく、各地で戦っていた曾国藩^{そうこくはん}將軍は、敗戦続きの不利な戦況を朝廷に報告する必要に迫られました。朝廷への上奏文は、事と次第によっては部隊全体と自分自身の今後に重大な影響を及ぼすことを、曾国藩は十分理解していました。そのため、將軍は部下が書いた上奏文の「戦っては敗れた」を眺め、しばし熟考したのち、自ら筆をとり「敗れては戦った」と書き改めました。その結果、曾国藩は朝廷から責任を追及されず、激励までされました。このことに勇気を得た曾国藩は乱を制圧し、その後清朝の名臣となっていきました。最初に敗戦という隠したい事実を正直に報告し、尚、敢闘精神は衰えていないという意見を評価した朝廷の厚い信頼と広い度量があったことはいうまでもありません。

経営不振に陥った建設機械大手の小松製作所を立て直した坂根社長（現在相談役）は、再建の第一歩を各事業部のマンスリーレポートの様式を改めることから始めたといわれています。それは、レポートの最初に **Bad News**（今困っている事、今後脅威となること等）を記入させ、リスク管理を徹底したことでした。同様の例として、トヨタのケンタッキー工場に採用されたアメリカ人の広報マネージャーが、管理職の定例会議で、**Problem First**（今抱えている問題を最初に報告する）に驚いたという話が「ハーバードでいちばん人気の国・日本」の本で紹介されています。悪い情報や耳の痛い話は誰でも聞きたくないものですが、その障壁を取っ払うことが優れた事業経営につながることをこの事例は教えています。

このような、曾国藩將軍の史実と小松製作所やトヨタの事例は、下位の立場から上位者へ報告・意見具申をする際には、何よりも下位者の純粋な心と上位者からの絶大な信頼の心が基本になければならないことを示唆しています。これからも「私心なき心」をもった社員の皆さんの積極的な意見具申と、社員へ「厚い信頼」をおく経営陣とが談論風発し、風通しの良い企業風土を醸成していくことが千代田の未来を決めるといっても過言ではないでしょう。私も双方の思いをくみ取り、微力ながら今後も助言させていただけたらと思います。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

2016/03/01

あぶ

私もあるとき、誰かのための虻だったろうか
～足らざるものを補いあう生命～

宮下佳廣

以前に紹介した「鎮守の森コミュニティ推進協議会」を立ち上げ2年が経過しました。会のメンバーは、30代から70代までの幅広い年代層ですが、大半は60代後半の企業O.Bを中心としたシルバー世代です。その活動を振り返り、現在実感していることをお伝えします。

当初の会の運営は、出身母体や業務経験の違いから手探り状態が続きました。活動の進展に伴い、各地への出張、関係省庁への申請業務、さらに合宿研修を通して、徐々にメンバー間の交流が広がってゆきました。個々の意見を無理なくまとめて企画提案書に仕上げる編集能力のあるT氏、財務的な知識が豊富で常に冷静なバンカー出身のS氏、正確な事務能力でバックヤードを固めてくれるH氏、事務処理や現場活動の人手不足に対応できるユーティリティープレーヤーのN氏と、それぞれの持ち味が発揮され出しました。各人の企業人時代に培った知見が役立ち、それが互いの足らざる所を補う形でつながっていくようになっていきました。このメンバーの勧誘については、社会貢献という志を第一義に考えていましたので、このような補完しあうチームになることは予想していませんでした。

一昨年1月に亡くなった詩人吉野弘の作品の中に「生命」という詩があります。

生命はその中に欠如を抱き、それを他者から満たしてもらうのだ
草花に限るまい、人の一生にも、受粉を助けてくれる風や虫がいる
わたしもあるとき、誰かのための虻だったろう
あなたもあるとき、わたしのための風だったかもしれない

作者は、庭に咲いている芙蓉の花に虻が他の花の花粉を運んでいる姿を見た時、受粉のために虫や風の他者を必要とし、「足らざるものを補い合う命」という自然のシステムに詩想が湧いたといいます。

社会や企業においても、家族や友人との関係においても、互いに欠如を満たすなどとは知りもせず、知らされもしません。ばらばらにいたもの同士が結びつき、信頼、友情、家族愛を育んでいきます。千代田のみなさんも、会社や家庭のそれぞれの立場で、自分是谁かのための虻や風になっているだろうか、又、自分にとっての虻や風は誰だろうかと視点を変えてみることで、何気ない日常の日々が輝いてみえることでしょう。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

新しい自分を創る
～良き習慣を、良き社風に～

宮下佳廣

スポーツ熱が一段と高まりをみせています。今年8月にはリオデジャネイロオリンピックが、2020年には待望の東京オリンピックがあります。今回の海賊からの便りは、昨年のラグビーワールドカップイングランド大会で活躍した五郎丸選手に見られるルーティンを、日常生活に置き換えて考えてみました。

今大いに注目されている五郎丸選手ですが、大リーグで活躍中のイチロー選手も、朝食はカレーライス、打席では17種類の決まった動作を習慣化していることで有名です。

この習慣について、スポーツの世界以外でも興味深い事例があります。南極の昭和基地では、長期間極限の状態で越冬するため、精神に異常をきたす隊員がみられることから、隊員のメンタルヘルスに大変気を遣っています。これまでの診断結果では、毎朝定時に起き、洗顔、整髪の身だしなみを整える等の規則正しい良き生活習慣を持続している隊員には正常者が多く、不規則な生活や身だしなみに気を配らず、自由気ままな生活をおくる隊員に異常者が見られるとの報告があります。このことは、規則正しい生活習慣が、心身の体調管理に役立っていることを示しています。

スポーツの場合のルーティンは成果を上げることを目的とし、意識して行いますが、南極の越冬隊員にみられるように、私たちが日常生活の中で無意識に繰り返している良き生活習慣は、幸福な人生の条件の一つにあげられます。それは家庭では親から子に、職場では上司先輩から後輩に原型が伝えられ身についてゆくものです。家であれば躰に始まる家風であり、会社であれば規律や規則から生まれる社風となります。無意識に行われるだけに、「良き習慣」になるかどうかは、親や先輩の指導や感化力が大きく影響します。年を重ねていっても、新しい自分を創るために、環境の変化に対応しながらブラッシュアップを重ね、自分なりの「良き習慣」を作っていくことが、良き人生につながっていくのではないのでしょうか。

この4月から新しい事業年度が始まります。新入社員の配属や転勤による新天地への異動など、職場に新たな風が入ってきます。この機を新しい自分を創るチャンスと捉え、先輩から受け継いだ型に皆さん自身の創意工夫を加えた新たな「良き習慣」を創り、それを「良き社風」につなげることを今年度の課題としてみてください。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。

他者に出逢うことは「自己」を知ることである
～新たな赴任地は生涯の財産～

2016/05/01

宮下佳廣

新入社員の皆さんはいかがお過ごしでしょうか。さらに今年も定例の人事異動が行われることと思います。それぞれの勤務地は故郷や学生時代を過ごした場所からも離れた所になることでしょう。そしてこれらの新天地では多くの人たちとの出逢いが待っています。私自身出光での現役時代、12回の転勤があり、それぞれの勤務地で色々な出逢いを経験しました。そのたびに新たな発見があり、多くの事を学びました。今回は、その体験の中から印象に残っているエピソードを紹介します。

今から50年前、四国徳島が最初の赴任地でした。ボイラー用の重油を売り込む営業マンとして、ある工場でイデミツコウサンですと名刺を出したところ、工場長から「デコウか」と言われ、次に訪問した時は「デビカリ」と呼ばれ、しばらくはまともに社名を呼んでももらえませんでした。悔しい思いをしながら1年ほど通った時、やっと「おいイデミツ」と声がかかり、そこからようやく商談が始まり、1年後に重油の納入にこぎつけました。しかしその半年後、突然その工場は経営不振に陥り、倒産し、債権者集会が開かれました。席上、憔悴した面持ちの工場長は言葉少なに平身低頭し続けておられ、私が挨拶すると「すまん」「早く一人前になれ」と寂しそうに声をかけてくれました。その時の「一人前になれ」の言葉は、社外の人、それも極限の状態の時の言葉として、それまでの社内での上司からの言葉以上に私の心に残り、その後の座右の銘となりました。

法語の中に、「他者に出逢うことは自己を知ることである」という言葉があります。わずかばかりの知識に満足し向上心を忘れがちになる、あるいは現在あることが当たり前となり、周囲の変化に対応していない、そんな時、案外、見ず知らずの他者が、それを気づかせてくれることが多いものです。現在の経済活動においても第三者機関や社外取締役の登用がみられるのは同様の事からと言えます。



札幌市立大学デザインコース 加藤羽留菜

千代田の強みの一つに全国各地に営業所があることです。地方には、その地域の歴史、伝統文化に根付いた知恵をもった賢人がおられます。仕事の面だけではなく、人生の師と仰ぐ人、あるいは友となりうる人を見つける機会に恵まれているということです。若い時に転勤を通して新しい赴任地を体験することは生涯の財産ともなります。皆さん一人ひとりが、各地で新たな他者に出逢い、鍛えられ遅くなっていたきたいと思います。

感想・ご意見など ym2041@axel.ocn.ne.jp 迄、ご連絡いただけたら幸いです。